

春燈

December 2015

12月号



主宰の句

安立公彦



軒寄せて眠る家並や星月夜

とりどりのこゑの身に添ふ虫の夜

秋夕焼善き一日でありしかな

酔芙蓉夕日の朱ヶを誘へり

手賀沼に秋惜しむ日や直哉の忌

片みちは歩いて春を惜みけり

『古暦』昭和二十九年

俳句をはじめた頃、一番先に覚えた句だ。言葉の調べの美しさと、溢れんばかりの叙情。

今も私を捉えて離さない。

「作句はね、歩いてこそだよ」、先生の声が聞こえてくるようだ。自然と向き合うやさしさは、先生ご自身のやさしさだ。愛誦する度にその味わいは深まるばかり。

春燈調って、いいなあ。

近藤 牧男

安住敦の句

月の句は月明りもて書き留めむ

『柿の木坂雑唱』昭和五十一年

風雅は勿論 月への敬愛の念が静かに伝わる。所謂「虫書」のそれと異なり、俳人ならではのゆつたりとした実感がある。思ひ出を誘う。子供の頃、稲の露を集めて墨をすり七夕の短冊を書いた。後、後楽園観蓮節俳句大会では蓮の葉の露ですった墨で賞状を書いて頂いた。安住先生のこの句の心、先人達の自然への敬虔な姿勢を深く学び、素直に継承したい。

白神知恵子

燈下集



○ 青柳雅子

御化けより人の怖さや円朝忌
ちちははの遺影若やぐ秋彼岸
お幾つになられましたか女郎花

一徹は淋しからずや暮の秋

宣長忌記紀のフィクションノンフィクション

○ 木多芙美子

ふるさとや旅人として虫を聴く

燃え尽くるまでの情念曼珠沙華

鳩吹いてひとり飽きあきしてあたり

山の上に山あり鳥の渡りけり

城跡や古地図に添うて蛇穴に

○ 小張志げ

人ひとり通れる路地のねこじやらし

橋渡る背に重たき後の月

猿山の猿を見てゐる敬老日

来し方を少しぼかして鳥兜

一羽二羽三羽初鴨小名木川

○ 太田慶子

「李白」てふよき名の酒や月の湖

秋の水さきへうしろへ魚影かな

秋風や秘めてふくらむ内緒ごと

水引草うれしきことを溜めてゐる

秋気満つ千手観音千一駄

○ 江 草 礼

天窓を音無くすべる木の美かな
すいつちよや跳んでわたれぬ水溜
鳥渡る木馬の眼ぬれてをり
ねこじやらし始末におへぬ朝の髪
ネックレスプツンと切れて秋の声

○ 見 田 英 子

武家小路塀をはみ出す花石榴
捨てし家訪へば梔子実をつけて
ふるさとの廃れし鉾山やまや蔦紅葉
いざよひの月卒寿の友の庭で待つ
壺に挿す秋の七草月を待つ

○ 長 谷 川 友 子

朝々の檸檬紅茶やビバルデイ
秋桜暗き歴史の面影橋
後れ毛を搔き上げ巡る瀉の秋
ゆで栗を剥けども食べる夫は亡し
赤とんぼ競ひて採りし子の日あり

○ 白 杵 游 児

恥づかしき米寿の五欲温め酒
木犀の香りそめたり素香の忌
遊び下手の昭和一桁猫じやらし
きな臭き世相や蛇は穴に入る
動物園用意の穴に入る蛇

○ 岩 永 は る み

足太き仔馬の駆ける今朝の秋
庭椅子に錆のうきたる白露かな
声変りせし少年や初嵐
自転車の荷台に揺れて秋桜
一合の酒そそぎたる墓参かな

○ 林 紀 夫

先導の僧の笑顔や吾亦紅
掃苔や考妣の声の「まだくるな」
一言の無音の詫びや居待月
白桔梗弦を離るる矢音かな(小諸句)
亀虫の固き守りや大手門

当月集

安立 公彦選



○ 龜小淵二美江

秋蟬の雨に鳴く声聞く夜かな

秋の雷一発弾けそれつきり

山国の単線の土手蔓珠沙華

故郷の友みな老いし蔓珠沙華

蹇に遠き家路や暮早し

○ 佐藤博重

をみなへし雨の明るき帰郷かな

兄ちゃんが叱られてゐる雁渡し

ざりがにの逃げ足速し秋日和

若きらと語る憲法ばつた跳ぶ

蓮の実一つ残して飛びにけり

○ 池田節

ひとり居の庭草の丈蚯蚓鳴く

街灯の届かぬ路地やつづれさせ

残り蚊の忍びの術に刺されけり

蕎麦咲くや噴煙淡き浅間山

幸村の郷より葡萄とどきけり

○ 赤岡茂子

秋うらら雷門の大わらぢ

萩叢に戯れぬる風の一頻り

絶え絶えの読経に数珠繰る秋彼岸

秋の川渡る列車の音軽し

耽続のパール・バックや夜の長し

○ 齋藤晴夫

蔓珠沙華咲かせ多難の秋津島

緑児は目に入れてもや敬老日

藤の実の下の小道を子等去んぬ

月見団子雲間の月へ供へけり

うつし世の一日を重ね露けしや

春燈の句

安立 公彦選

秋蝶の古刹への径誘へり（谷中四句）

神奈川 溝越 教子

秋の寺維新の弾痕古りにけり

秋日今落ちて鴉の声高し
玻璃越しの空に映ゆるや秋夕焼

木犀の香に包まるる観音像

晩年はやつてくるもの実むらさき
鮎落ちて瀬音高まる日暮かな

深秋や寺町守る築地塀

茨城 山崎 刀水

たまゆらの静けさを聴く秋日和

東京 河崎 國代

捨てかぬる古書を並べて瀨祭忌

どの子にも日差さはさは運動会
故郷への最後の墓参済ませけり

薄霧や思ひ届かぬもどかしさ

神奈川 丸山 允男

月代の雲の翳りを愁ひけり

天皇の稲刈報ず佳き日なり

神奈川 山下 健治

刈田道歩けば遠き筑波かな

縁側の至福の二人月の客
存分に煙を上げて秋刀魚焼く

シベリアの風をまとひて雁渡る

秋蟬や忘るることの多くして

兵庫 秋山 葛

吹荒れてひと夜を秋の深みゆく

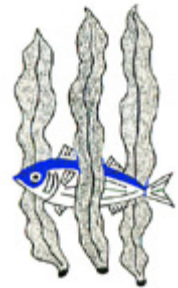
天高し父祖伝来の地に生くる

秋風と登る石段寺高し

京都 曾根 京子

灯を消して寧けき闇に虫を聴く

天高し黒牛の鼻いよよ濡る
山中へ消ゆる秋蝶見送りぬ



余言

安立公彦

月を待つらしき一人や橋の上

西川 保子

今年の仲秋の名月は九月二十七日。但し月齢13・8で、望月は翌二十八日の十六夜の月だった。スーパームーンという聞きなれない言葉も紙面を賑わした。

この句、その名月の夜、一人の（男）が空を仰ぐかに橋梁に佇んでいる。月の出を待っているのか。「月を待つらしき一人や」が、その（男）の姿を活写している。月面探査機が月面着陸して半世紀を数えるが、それでも明月を仰ぐ気持は全ての人に深遠な思いを抱かせる。

満月や吊革に身を委ねぬて

三上 程子

所用で外出した作者。仲秋の日没は早い。混んだ車内で「吊革に身を委ね」ていると、突然車窓はるか雲の狭間に満月の浮かんでいるのが見えた。これは実景であろう。

作者の驚きと悦びは如何ばかりか。吊革を固く握り、満

月を見ようと身をのり出している姿がみごとに表現されている。この一瞬、作者は車中の労も忘却して名月を心ゆくまで堪能するのだった。俳句を知ることの悦びである。

柿熟るる「おいでなもし」と子規の声 加藤 良子

「おいでなもし」の「もし」は、対話の際、詞の終りに付ける語で、主に尾張、飛騨、四国で使われていると辞書にある。この句の場合は「子規の声」があるので、愛媛を指すことは容易に分かる。漱石の『坊つちやん』には「山嵐で何ぞなもし」ほか、主人公との会話で土地の人が語る「もし」が対話を生きいきとさせている。

子規が「柿くへば」の句を作ったのは二十八歳の時と言う。この句、「おいでなもし」を活かして、子規の「柿」を一幅の絵画のように絶妙に表現している。

障子貼つて夕日の影のやはらかし 高橋 和女

「障子貼る」という季語は、現代に残る如何にも日本的な情感を持つ言葉だ。それを秋季としたのは、「障子」という冬の季語を一段と奥深いものとする備えの意味もある。尤も最近では二年に一度という家庭もあるだろう。

この句、「夕日の影のやはらかし」に共鳴する。貼り替

えた障子の落ち着いた白さに、先述の情感を文字通り軟らかく取り入れている。とりわけ「影」の一字が効果的だ。言わずもがなの事だが今年は拙宅の障子も貼り替えよう。

ひとり来て秋とふたりのベンチかな 近藤 牧男

外来語の中でも「ベンチ」という言葉はみごとに日本語化している。詩歌の中に用いられても語感に無理がない。

この句、「秋とふたりの」が生きている。秋という季節の表現を、ふたりという人称と混用している、と言うのは散文の俗言である。この句は「秋とふたりの」により、俳句という詩形に奥ゆきをもたらしている。この作者の句には折おりこのような作品が見られる。

秋草を気ままに挿して定食屋 吉澤恵美子

「定食屋」、懐かしい名前だ。今更書くまでもないが、定食は、飲食店であらかじめ献立の決まっている食事。最近では、レストランチェーンやハンバーガーショップなど、大規模な外食産業が大勢を占めていて、そういう店は定食屋という呼び名にそぐわない。

作者の知る定食屋は、繁華街を逸れた辺りにあるのだろう。店の窓辺には名もない秋草が陶器の壺に挿してある。「気ままに挿して」に作者の思いがよく出ている。

大花野いつも先ゆく夫なりけり 竹内 慶子

俳句の鑑賞には大別二つの見方がある。見方と言うより立場と称した方がいかも知れない。即ち作者をよく知る人と、あく迄も表現されたものへの考え方の二つである。

最初句会でこの句を見た時は、妻が一步遅れて歩む姿を想像した。それも良い。中七の背景が「大花野」ゆえ、昭和の妻の姿が慎ましやかに受けとれた。しかし作者が分ると、この「夫」が昨年急逝された夫君と分かり、「いつも先ゆく」に作者の深い思いが宿っているのを改めて感じた。この句の表現には、原句以外の言葉は要らない。作者を知る人も、そうでない人も、この句から受ける思いは、句を読む人それぞれが感じとることであろう。「いつも先ゆく夫なりけり」の現在法は、内容をよく受けとめている。

待つことの多きこの世や酔芙蓉 篠原 幸子

改めて考えて見ると、私たちの日常は「待つこと」の連続である。寒くなると春を待ち、暑さが続くと爽涼の秋を待つ。一方そういう季節的なことより、もっと切実な思いで「待つ」明け暮れもある。むしろその方が多かるう。

作者もそういう待つことの思いを深く噛み締めているお一人なのだ。しかしこの句、「酔芙蓉」が善い。切実な思いを酔芙蓉の彩りの変化が爽やかに支えてくれている。